丘友會報

発行　亀山市本町
亀山高校内
丘友会事務局
会長　森　信夫
編集　丘友会
印刷　オリエンタル印刷

同窓会の寄付金で
校門・記念碑完成
昨年の総会で披露・除幕式

昭和四十五年から始まった母校の校舎改築にともなう丘友会の募金運動の結果約三七〇万円の浄財が会員の皆様から寄せられ、この寄付金によって、昨年八月待望の校門と鈴鹿高等女学校「追憶之碑」が完成、同月二十日の丘友会総会のさいその披露と除幕式が行なわれました。

校舎改築工事が始まって以来約十年、亀山高校は校門のない状態が続いていましたが、一昨年末の校舎改築の一段落と昨年の校門完成によって、高校のキャンパスとしてのまとまりができあがったわけです。二学期になって初めて新しい校門を通る生徒たちも、「これでやっと学校らしくなった」と喜んでいました。

記念碑は校門のすぐ左脇に建てられています。その除幕の日には、鈴鹿高女の卒業生約五十名が参列し、校歌斉唱のうちに森会長と鈴木副会長の手で除幕が行なわれ、黒御影石（幅一メートル、高さ八〇センチ）に刻まれた鈴鹿高女の校歌の一節「鈴鹿の川は流れてやびゆ、鈴鹿の峰は高くそびゆ」が姿をあらわすと、参列者の中には往時を偲い起こして涙ぐむ人もいました。

昨年8月「追憶之碑」の除幕式

現在校地の中には、鈴鹿高女の面影をしのぶものは何一つなく、この「追憶之碑」だけが「この地に鈴鹿高女ありき」の証しとして永久に残ることになったわけです。

鈴鹿の峰は高くそびゆ
―校門・記念碑の完成に寄せて―

副会長　鈴木幸子

平素は丘友会発展のために何かと温かいご協力をいただき誠に有難うございます。本年も去る三月新入会員として五百八名をお迎えして丘友会員の数も一万五千百七拾名を数え、日本の各地に、また時には遠く海外までも活躍の会員もあると聞き誠にたのもしく存じます。

昨年度の会報で発表されて、また総会でもご披露しましたのでご承知のことと存じますが、皆様方の寄付金によって建てられました校門と記念碑についてこの会報を通じてご報告とお礼を申し上げます。

昭和四十五年に発足しました母校改築にかかる同窓会の募金につきましては皆様方の温かいご援助とご協力によりまして次第に目標額に近づきましたので、その使途につきまして五十一年度の総会の席で出席者の方々のご意見、ご希望と校長先生はじめ学校側のご諒解のもとに、改築工事完了の暁に、その全体の景観にふさわしい校門を同窓会の寄付によって作ることに決定いたしました。当時も物価高のなかで、皆様よりの貴重な浄財が目べりすることを案じましたが、幸い当局者の方々のご努力により五十一年十二月管理棟の竣工を最後に校舎の改築が完成されましたので、昨年の夏期休暇に入るのを待って校門の建設が着手され、完成されて昨年の総会には校門の披露と記念碑の除幕をいたしました次第でございます。

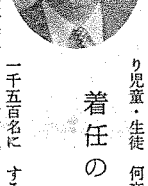
山もあり川もある亀山市の一角にそびえ立つ白亜の殿堂とも言いたい威容を誇って亀山高等学校が装い新たになり、そしてその正門は丘友会員の温かいお心をひそめて清楚に佇んでおります。この門を通って今後幾万の郷土の若人が育まれ巣立つことを、丘友会の会員のお一人お一人が祈り、かつ見守っているのではないでしょうか。

また記念碑につきましては、五十二年度の総会で、前身の鈴鹿高等女学校の追憶のようがとなるものを残したいとの要望に添って、その建設が決定され、校門の付帯工事として実現されたわけでございます。この記念碑は、今はその名も面影も留めていない鈴鹿高等女学校の「追憶の碑」として、この地に亀山高等学校の存続する限り永久に残るものと存じます。表の碑文このたび、春の人事異動により地元亀山高校に参りました小林でございます。

丘友会々員一万五千名を擁し、歴史と伝統を誇る本校に勤めさせていただくことになりましたことを光栄に存じています。

丘友会の皆様には平素母校のため暖かいご理解ご支援をいただき深く感謝申し上げる次第でございます。

さて私は亀山生れの亀山育ちで、新しい鉄筋四階建校舎が立ち並ぶ校庭は、四十五年の昔に女子師範の付属小学校の一児童であった頃の学び舎の場所であり、数々の思い出につながる懐しい処でございます。



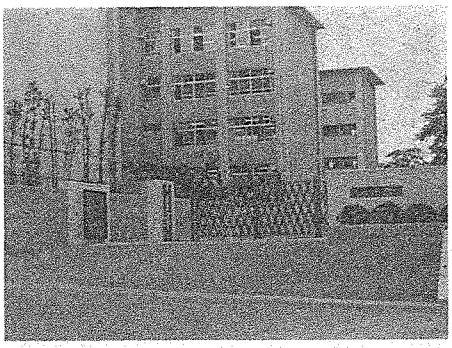
現在の本校は生徒数において県下で三番目に大きい総合制高校であり、更に地域の勤労青少年教育の場としての夜間定時制課程を併設し、保育科の実習施設「ふたば園」をも併置しており児童・生徒一千五百名に及ぶ大世帯であります。亀山市を中心として津市、安芸郡、鈴鹿郡、鈴鹿市の広い地域からの生徒が、静かなよい環境のもとで楽しい学園生活を送っています。これらの次代をになう若人に、将来社会に役立つ人間としての基礎を十分に身につけさせ、学力、体力、気力ともに備わった調和のとれた後輩として世に送り出すべく微力ではございますが全力投球で教育に当たる決意でありますので、丘友会の皆様におかれましては何卒母校発展のため旧に倍するご支援、ご鞭撻を賜わりますようお願い申し上げます。

着任のごあいさつ

学校長　小林尚志

また、地元在住の卒業生有志の方々のご配意で五十二年五月に発足いたしましたクラブ活動後援会は、他校に例の少ない学校教育支援体制で文化運動クラブで活躍する後輩達に無言の教訓と激励を賜わっていることに対し併せて厚くお礼申し上げます。

なお、本校のご縁につながる者として、私の父・福岡法重が昭和二十七年から四年間第三代目の校長として教職生活の最後を本校で勤めさせていただき、齢八十才になりましたが元気で奈良市学園大和町の方で余生を楽しんでいますので、お世話になりました会員の皆様にお礼を申し上げ、父子二代で地元高校に勤務するご縁を大切にしていきたいと念願いたしまして、着任のごあいさつにかえさせていただきます。


同窓生の浄財で昨年8月完成した母校の校門

東海高校総体
七名が全国総体へ出場

平田君（三段跳）
藤田君（重量挙）
みごと優勝

第26回東海高校総合体育大会は、去る六月二十三日・二十四日の両日静岡県で行なわれましたが、母校からはウエイトリフティング部・陸上部から十一名の選手がこれに出場し、そのうち入賞した七名が八月の全国高校総体に出場することになりました。

陸上部（三段跳）の平田素久君（三年）は、自己最高の一四・八五メートルを出し、陸上部としては久しぶりの東海総体優勝者となり、後輩たちにとって大きな励ましとなっています。

東海総体での成績は次のとおりです。（○印は全国高校総体へ出場）

× 放送部も入賞 ×

NHK杯全国高校放送コンテスト三重県予選大会で母校放送部が次の成績をおさめ全国大会へ出場します。

総会のお知らせ

第二十二回丘友会総会を、会則の規定により次の通り開催します。

総会当日には、昨年の亀高学園祭で好評をはくしたパネル展示「写真にみる亀高三十年の歩み」（前史として鈴鹿高女・亀実の思い出の写真を含む）を総会々場で披露いたします。懐しい母校の学び舎を現在のそれとを比較しながら懐旧談にふけるのもまた一興かと存じます。

どうか万障お繰り合わせの上、ぜひご出席下さいますようお願い申し上げます。

なお、ご出席の会員には昼食の用意をさせていただきますのでお含み下さい。

記

一、日時　八月十二日（日）午前十時より
一、場所　亀山高校管理棟一階会議室
一、協議事項
1、昭和五十三年度経過報告・会計報告に関する件
2、昭和五十四年度事業計画に関する件
3、その他
総会終了後、記念撮影・懇親会を行います。（終了予定時刻午後三時）

（高女七回卒）

昨年の母校学園祭パネル展示「写真でみる亀高三十年の歩み」

お知らせ

定時制同窓会と親睦をかね左記の通り実施いたしますので多数御参加下さい。

記

実施日時　八月四日　午後六時より
場所　亀山青少年研修センター
会費　三、〇〇〇円

㊟住所不明等により連絡出来なかった方で参加希望をされる方は北沢（電話亀山　自宅二一一〇五九三　職場二一一三四二）まで御連絡下さい。

母校職員の異動

◆転出

氏名	在職年数	転出先
後藤裕文	3	神戸高校
川辺リン	30	退職
長谷川衛	22	死亡退職
川端栗	19	津工業高校
田川英樹	10	津商業高校
斎藤憲一	7	津西高校
増田悦子	6	津女子高校
杉者政幸	5	員弁高校
武田弘子	7	石薬師高校

◆転入

氏名	教科など	前任校など
小林尚志	校長	宮川高校
天野泰	体育	四日市中央工業高
石丸久	社会	員弁高校
稲垣幹子	養護	雲林院小学校
羽野雅彦	英語	南島高校
古川孝子	家庭	新採用
細野道太郎	理科	長島高校
松ケ谷光広	体育	桑名西高校
渡辺勝子	家庭	白山高校
山木栄子	事務	鈴鹿土木事務所

母校教諭

長谷川衛先生逝く

二月二十日　しめやかに全校追悼式

故 長谷川衛先生

母校保健体育科教諭長谷川衛先生が去る二月三日早朝、心不全のため急逝されました。享年六〇歳でした。

故長谷川先生は、昭和三十二年四月に四日市農芸高校から亀山高校に転任され、昭和三十七年から二十三年まで六年間にわたる兵役・抑留生活中のご無理が遠因となって昭和三十四年に発病され、それ以来の長い闘病生活でしたが、その間も、一五〇〇名の生徒の健康をあずかる保健主事として、またバトミン部の顧問としてはたびたび同クラブを各種大会で入賞させるなど、母校の教育のために献身されました。

二月三日、先生逝くの訃報に接したとき、全校の生徒・職員は深い悲しみにつつまれました。二月五日ご自宅で告別式、二月二十日に全校集会のかたちで追悼式がしめやかにとり行なわれ、先生のありし日々を偲ぶとともに、故人のご冥福を祈りました。

故 長谷川先生をしのぶ

蔵城　照子

筆不精の私が、はずかしいと思いながら、身近かにいらっしゃった長谷川先生のありし日の思い出を、ありのまま書けたらと筆を取りました。

私が母校へ赴任したのは、十五年程前で、それより二、三年前から先生は亀高に見えたようにきいております。その頃は、まだ大へん御元気でした。

初めてお会いした時はやさしそうな、丁寧なお言葉で、親切にお話ししていただいた事をおぼえております。それは、そのままこの先生のお人柄でした。

登校しますと、体育科職員室の履物はいつもきちんと整理され、机の上はきれいに整頓されており、床もきれいにみがかれてあるのには、びっくりしました。これが毎日つづきました。私は、なんとなく頭が下がる様な、ひきこまれていくような気持でした。一日中気持のよい職員室にと、川辺康子先生(現白子高校)と、気をつけたものでした。

保健に関する研究も熱心で、わからない所ばかりの私は、先生をよい参考書がわりにさせてもらいました。

また、生徒の指導にもきびしい所がありましたが、生徒には納得の行くように話され、特にクラブの指導には、技術的にはもちろん、生活面にも、きびしいながらもやさしく指導されていることがたびたびあり、私も共に反省をしながら、先生のお話しを聞かせていただいておりました。

新しい保健室へこられてからは、先生のご病気もだんだん悪くなったように思いましたが、最後まで一日も休まれず、ひまさえあれば参考書を読み、研究され、また、私が病気になった時は、はげましの言葉をいただき、その時の言葉が今だに頭に残っています。

楽しい時もありました。

校舎が綺麗になったから見てゆかぬかと誘われて母校を訪れたことがある。

すっかり変貌した校門に立つと、それでも講堂や瓦屋根の木造校舎、泰山木の小暗い木陰の位置まで思い出された。わきに黒御影の真新しい記念碑があった。変わったという感じが余計深くなった。思い出はそれぞれの胸のうちに納めている方がよいので、形に留めていつまでも「昔」を主張し続けるのは好まない。古くからの木を数本そのままに残してもらったらもっと懐しかったろう。

ふりかえると鈴鹿の山なみばかりは殆んど昔のままの姿であった。朝の光を浴びた仙ヶ岳は好きだった。下校のとき、そのあたりはかげって、鎌ヶ岳の南壁だけが心もちあかね色を帯びているのは、一日の学校生活のなごりであった。校門付近から見る鈴鹿の山々が先生のお家へ行っては、柿を取ったり、栗をもらってお餅をやいて食べたり、それも今では懐しい思い出となりました。良き相談相手、何んでも話せる先生がもうみえないのかと思うことがたびたびあり、涙が出そうになるのをこらえていることがあります。

どうか、長谷川先生、私達も一生懸命、先生の御教訓を思い出して、がんばって行きたいと思います。ご冥福をお祈りします。

(母校保体科教諭・亀高4回卒)

私の記念碑

蓮井　敏

鎌も仙ヶ岳も、御在所や野登山より知名度は少しおちる。しかし、鋭角的な山容は登ってよし眺めてよしの鈴鹿の名山としての風格を備えている。

西側から見るとよく整った三角形の峰が山なみの上にきちんとそびえていて一層美しい。

わが家の近くの山に登ると、天候がよければ五十キロ先に鈴鹿が見える。瀬田川や琵琶湖の向うに鈴鹿が見えた日は、一寸うれしくなって下山する。

近江路からも京の山からもそれらは見える。鎌ヶ岳の南壁が午後の陽に白く光るのも、南に続く鎌尾根も。あの尾根を歩いたのは、山岳道路は勿論、ロープウェーも通じる前だった。頂上で鹿に出会った仙ヶ岳は、ピーンと冷えきって、それでいて陽光が膚に快い冬の朝、校門や運動場から見えた御岳も懐しい。しんと静まりかえった白い山は、どこか温かみがあってよかった。寒さのゆるむ昼近くには、もう霧と山の区別はつかなくなるのだった。

今でも、冬の朝、御岳は見えるだろうか。折あらば、母校からの御岳をもう一度見たいと思う。そのとき私は、二十数年前のツメ襟の私にすっと戻っていけるだろうと思う。(亀高九回卒、山科在住)

丘友会の発展を祈念して

会長　森　信夫

丘友会のみなさん、盛夏のみぎり、ご壮健でお過しのことと存じます。

平素は母校ならびに同窓会(丘友会)発展のため格別のご支援とご協力をいただき深く感謝しております。

ご承知のように、母校は昭和四十五年から始まった校舎改築事業も一昨年十一月に完成し、めぐまれた環境の中に、そびえ立つ四棟の校舎を眺めるとき感慨ひとしおのものがあります。

すぐれた教育施設、設備の充実、熱心な教職員各位のご指導と、生徒諸君の真面目な態度などますます発展の姿は、まことにうれしいかぎりであります。

丘友会も本年五百余名の新会員を迎えて、一万五千人を超える大世帯に発展しました。そして母校の卒業生として県下は言うに及ばず、全国各地でたくましく活躍していられる会員各位の消息を聞くとき力強い感激となつかしみを覚えるのであります。

古い諺に「衣は新に、しくはなし。人は故に、しくはなし。」といわれています。即ち着物は新しいものほどよいし、友人はふるいほどよいものであるということでありましょう。新しく改築された母校で年一度ではありますが総会を通じて、また丘友会報をご覧になって、過ぎ去った、なつかしい高校生活の想い出をあるいは級友との交りを更に深めていただきたいものだと思います。そして職域に地域に同窓の輪を広げてゆきたいと念ずる次第です。

終りになりましたが、会報の編集発行、総会の準備など日頃から丘友会のお世をいただいている母校の教職員の方々に紙面をお借りして厚くお礼申しあげます。

会員のみなさんの一そうのご自愛とご多幸をお祈りして、ごあいさつと致します。(亀高定時制二回卒)

亀山高校ひとすじの三十年

— 退任のごあいさつ —

川辺　りん

つゆ明け間近かを思わせる青空のさわやかな今日、丘友会の皆様には、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて私こと今年三月三十一日付をもちまして、亀山高校を退職させて頂きました。願みますと発刺とした元気一杯の生徒達の雰囲気の中で私も老いた身を忘れて一緒に若々しい気持で毎日を過させて頂き誠に感慨無量でございます。

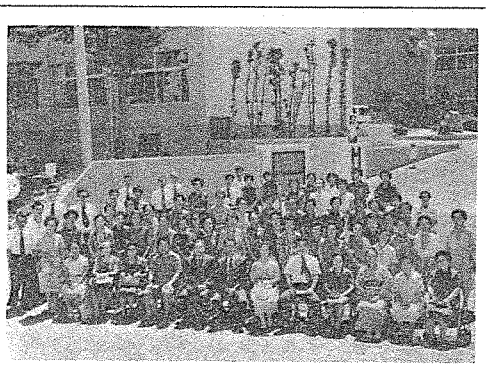
三十年余りの長い間、公私共に、ご親切にご指導ご援助をたまわり、お蔭をもちまして大過なく職責を果させて頂きましたこと、衷心より厚くお礼申し上げます。

昭和二十四年一月三十一日付の就任当初から、三十年余りの亀山高校ひとすじの勤務でした。その間の思い出が走馬燈の如く次から次と今更ながらのようになつかしく思い出されてまいります。

学校の近くに居住する私に野球部員の一生懸命に練習するかけ声が聞えてまいります。いまは期末試験中とか聞いておりますが、頑張って下さいと声援してやりたい気持でございます。

私の住いから第四棟の校舎がながめられ、亀山高校への想いは一入でございます。これからは健康に留意して余生を送りたいと思っておりますが、どうぞ今後とも変らぬご交誼をたまわりますようお願い申し上げ丘友会ならびに亀山高校のますますのご発展をひたすら念じております。

最後になりましたが丘友会よりのお餞別、ご厚志の程誠にありがとうございました。誌上をもちまして厚くお礼申し上げます。(前母校養護教諭)


S53年度丘友会総会の記念撮影、近来にない多数の出席者

会員の消息を事務局へ

昨年夏、丘友会会員名簿第五号を発行しましたが(発行部数約四、〇〇〇)かなりの会員の消息がつかめないまま(約一割)発行せざるをえませんでした。人事はつねに流動しておりきょうの消息はあすの消息とは限らないところに名簿づくりのむずかしさがあります。しかし、会員相互の消息を知らせ合うのが同窓会の生命である以上、よりベター な名簿づくりをめざさなければなりません。

名簿第五号発行後の一年間に、約一〇〇名の会員かぶ新しい消息を知らせる便りをいただいています。

名簿第六号(昭和五十八年発行予定)の準備作業はいまから始まっているといえます。

どうか、会員の転居・改姓その他にともなう新しい消息を丘友会事務局へもご一報下さい。次回の名簿をより充実したものとするため、会員の皆様のご協力を切にお願いするしだいです。

会員数統計
(S54.3含物故者)

鈴鹿高女		2,387
亀高	男	4,658
	女	8,133
合計		15,178

教育実習で感じたこと

岡本　亘

このたび四年ぶりに母校を実習で訪れる事となって期待と不安の入りまじった気持ちで亀山高校で二週間勉強させてもらいました。

最初に感じた事は、なんて近代的な設備の整った校舎ばかりだろうと驚きました。特に視聴覚教室とLL教室があるのを見て、他校にも決してひけを取らないすばらしい設備の中で勉強できる亀高生を本当にうらやましく思いました。

カリキュラムにおいて、必修クラブの時間が設けられて、いろいろと自分の趣味にあった好きな事ができるのは大変良い事だと思います。又、この時間には亀高生全体の縦のつながりだけでなく横のつながりを求める事ができ、必修クラブを通じて広く視野を見つめる事ができる場であるからこれからも大いに続けられる事を望みます。

服装も緩くなってかなり表面的に自由で良くなったと思いました。例えば靴なども、昔は黒の皮靴が規定されていたが今では白のズックが認められ気分的にもリラックスして登校しているのでしょう。そして先生と生徒との交流もわりと積極的に行なわれているのも良い傾向だと感じました。

ただ在校生の皆さん全体を通して見た感じでは、全体的にはどうも積極性らしきものが欠けているような生徒諸君が多いのではないだろうか、それと自主性というものが今ひとつ確立していないように見うけられました。

でも、いろんな事を受けとめる態度は非常に素直でその長所はなかなか一人一人すばらしい物をもっているような気がします。

最後に、わずか二週間の実習でしたが、我々にとっては一生忘れえぬ思い出となりました。いろいろとお世話くださった諸先生方に感謝し、今後はよりいっそう活発な生々した盛り上がった学園を生徒の皆さんが造っていかれる事を期待しております。(亀高50年卒)

事務局交替にあたって

野田　和章

丘友会事務局は、母校に勤務する教職員の中から互選された数名の係によって運営されています。たまたま母校に勤めた者の、一度は経験しなければならない三年間の年期奉公のようなものである。

母校へ勤務する者が必ずしも同窓生意識旺盛とは限らないところに悩ましさがあり、小生なども三年前にこの役を引き受けたとき、ずい分重荷に感じたものである。

事務局業務は校務の中には入れられておらず、いうなればプラスアルファの仕事であり、小生のような凡夫にとっては、ずい分難しい仕事であった。

それでも、森会長をはじめとする役員諸氏、心強い会員諸氏の暖い励ましの姿で、辛うじて三年間の務を続けることができました。

その間、名簿第五号の発行、同窓生寄附金による校舎記念碑の建設が行なわれたことが長かった三年間の痕跡として、ささやかでとも自ら慰めるところのものとなっている。

事務局係のうち、福島子(旧姓野田、亀高十回卒)、西村るみ子(旧姓本城、二十三回卒)と小生は三年の任期満ちて五十三年度に退任し、新たに三名を加えて、五十四年度は西村栄二(亀高七回卒)、牛尾弘子(同九回卒)、森尾龍夫(同十一回卒)、広森徳江(旧姓中川、同二十二回卒)の四名が事務局を担当することになった。どうか今諸賢のご支援を切にお願いするしだいである。

丘友会を支えるもの、それは同窓生の物心両面にたるご支援であることはいうまでもないが、いわば下の力持ちとして、手当て事務局業務に黙々と事している係の存在が大きいことも否定できない。自賛のそしりを覚悟でこのことを申し添えたい心情に理解願いたい。

なお、いわずもがなのことで、毎年会員の手元に送られているこの「丘友会々報」の発行・郵送費はその年度の卒業生の入会(一人一〇〇〇円)によって賄われているともあわせてご承知いただきたい。

最後に、三年間の任期くしけそうになる事務局叱咤激励していただいた丘友会々員の皆様に厚く御礼を申し上げたい。

(母校社会科教諭・亀高九回卒)